

パスカル再読 ——『パンセ』における「配列」と聖書的レトリック——

ロラン・シュジニ（ソルボンヌ大学）
（山上浩嗣訳）

レトリック、とくにパスカルが用いる「配列 *disposition*」または「秩序 *ordre*」の2語について論じる¹。ただし、パスカルが構想していたという仮説に基づく「キリスト教弁証論」が完成した際の秩序ではなく、『パンセ』において擁護され、説明されている秩序の概念についてである²。

この問題がパスカル研究の重要な転換をもたらしたのはもう四十年も前のことだ³。簡単に言えば、われわれはそれ以後、『エッセー』の代名詞である「直線的方法 *une droite méthode* の拒絶」を取り入れながらも、同時にモンテーニュの「混乱 *confusion*⁴」を非難することで、パスカルがいかにして、聖書に見られる「心の秩序 *ordre du cœur*」をモデルとすることができたかを理解するようになった。この「心の秩序」は教えるよりも感動させることを目的としているのだが、理性の傲りをくじくために、一見すると秩序がないように見えるのだ。

しかし、ここで注目したいのは、「心の秩序」が、議論の運び *progression* や連鎖 *enchaînement* の配列（修辞学の *dispositio* に対応）にとどまらず、テキストという空間のなかで、反復 *répétition* や対置 *opposition* といった単純な修辞的手法がいかにか配置されているかという問題にも及んでいる、という点である。これらの配置様式は、純粹に文体的な次元、すなわち修辞学で *elocutio* と呼ばれた領域においても、きわめて厳格で確固とした構成原理として機能している。

今日よく知られるようになっているが、聖書に見られる対称性 *symétries* [文中に見られる複数の文言間に認められる共通点や類似性のこと] は単なる詩的緊張の結果ではない。それは書き方の原則であると同時に構成の原則であり、それら対称性の分布の特質を見れば、言説 *discours* の構造と結びつきが理解できる。

¹ この点について、より詳細には次を参照：L. Susini, « "Les mêmes mots forment d'autres pensées par leur différente disposition" : l'insinuation dans les *Pensées* de Pascal », *Courrier Blaise Pascal*, n° 46, 2024, p. 397-408.

² 次を参照：Jean Mesnard, « L'ordre dans les *Pensées* », *Dix-septième siècle*, vol. 261, no. 4, 2013, p. 575-602.

³ 主要な参考文献は次の通り：Laurent Thirouin, « Le cycle du divertissement », *Studi Francesi*, n° 143, 2004, p. 260-272；Jean Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, Paris, SEDES-CDU, 1993, p. 177；Philippe Sellier, « L'ordre du cœur », dans *Port-Royal et la littérature. Pascal*, Paris, Champion, 2010, p. 262-263；et Laurent Susini, *L'Écriture de Pascal*, Paris, Champion, 2008, p. 584-599 et « Pour un Pascal juif. Ordre du cœur et rhétorique biblique dans l'œuvre de Pascal », dans *Retorica biblica e semitica 3. Atti del terzo convegno RBS*, dir. R. Meynet et J. Oniszczyk, Bologne, EDB, 2013, p. 317-345.

⁴ Pascal, *Pensées, opuscules et lettres*, éd. P. Sellier et L. Plazenet, Paris, Classiques Garnier, coll. « Bibliothèque du XVII^e siècle », 2010, fragment 644 (on notera désormais *Pensées*, S. 644). Voir L. Thirouin, « Le défaut d'une droite méthode », *Littératures classiques*, n° 20, 1994, p. 7-21.

実際、ロラン・メネ⁵以後これまで研究されたすべての聖書テキストは、AからBへ、BからCへという直線的な仕方ではなく、厳格な規則に従う並列構造の「はめ込み *enchâssement*」によって進行する傾向を示している。そして、その並列構造はたいてい一点のまわりに、部分的対称性 *symétries partielles* [後述] のネットワークに基づいて配置されている。このことは、それら並列構造の「書き換え *réécriture*」、すなわち、きわめて規則的で単純なレイアウト様式に基づいて並列構造の分布を図示することで明らかになる。

もっとも、本論において、分析の詳細や書き換えの規則および用語の特殊性を重要視する必要はない。肝心なのは、聖書のレトリックの分析を導く原理と、それを適用することで得られる次の二つの結論に注目することだ。

- 1) 聖書の配置は、一定の順序に沿った物語や議論の連なりであるばかりでなく、それらを構成する語彙、統辞、音韻が相互の反響 *les jeux d'échos* を通じて協調することで構築されている。
- 2) この視点から見ると、聖書はマトリョーシカのように構築されており、しばしばメノラ *ménoras* のようにも見える。メノラとは、7つの枝が中心を囲む3つの平行構造に沿って連なるユダヤの燭台である。そして、このような発見の結果は、聖書の構造や順序の理解においても、その解釈の理解においても意義深い。観察可能なさまざまなレベルの「はめ込み」により、分析対象となる大小さまざまなテキスト・ユニット（一つの節 *verset* から聖書全体まで）の境界を定めることができる。そして、これらの異なるレベルで見出される類似性により、あるユニットを解釈する際に、それをどのユニットと対照して読むべきかが判明する。

このように聖書的レトリックについて長々と説明することに意味があるとすれば、それは、『パンセ』のさまざまな断章を大胆に書き換えることで、それらが厳格に聖書と同様の構成の規則に従っていると主張しうるからだ⁶。下記がその例である。

- ・「メモリアル」：ABBA型の反射的構造 *structure réflexive*⁷ (Annexe 1⁸)

⁵ とりわけ次を参照：Roland Meynet, *L'Évangile de Luc*, [1988], Lethielleux, Paris, 2005 et, du même auteur, *Traité de rhétorique biblique*, Paris, Lethielleux, 2007.

⁶ 次を参照：R. Meynet, « Pascal et la rhétorique biblique », *Courrier du Centre International Blaise-Pascal*, n° 38-39, p. 2019, p. 71-86 ; L. Susini, « Pour un Pascal juif. Ordre du cœur et rhétorique biblique dans l'œuvre de Pascal », dans *Rhetorica biblica e semitica 3. Atti del terzo convegno RBS*, dir. R. Meynet et J. Oniszcuk, Bologne, EDB, 2013, p. 317-345, et du même auteur « Pascal, Montaigne et la Bible. Un faux pastiche peut en cacher un vrai », *Littératures Classiques*, n° 74, 2011, p. 91-106.

⁷ 次を参照：R. Meynet, « Le Mémorial à la lumière de la rhétorique biblique », *XVII^e Siècle*, n° 261, 2012/4, p. 603-622 et L. Susini, « Le Mémorial de Pascal, texte monument », *L'inscription du monument (XVI^e-XVII^e siècles)*, dir. J.-P. Grossepperrin, *Littératures Classiques*, n° 104, 2021, p. 123-135.

⁸ Annexes 1-8 は本稿末にまとめて掲載。

- ・ S145⁹ (Annexe 2), S165 (Annexe 3), S166 (Annexe 4), S171 (Annexe 5), S211 (Annexe 6) : ABA 型の単純同心円構造 *structure concentrique élémentaire*
- ・ S339 (Annexe 7) , S786 (Annexe 8) : ABCBA 型の同心円構造 *structure concentrique*

この現象には困惑してしまう。パスカルは聖書のレトリックに関する論考から影響を受けた形跡はない。そもそもそんな論考は書かれたことがないゆえ、聖書の構成規則は、聖書そのものの継続的分析から推測するほかない。セム語の『弁論家について』[キケロ]や『弁論家の教育』[クインティリアヌス]はないが、「神は神自身についてうまく語る」(S334) という原則に基づいて、パスカル自身も神から養分を得ることで、神のごとく語ろうとしたと仮定することはできる。

いずれにせよ、この仮説が偶然によるものではないことを裏付ける三つの要素がある。

- 1) [何度も同じ現象が見られるという]反復の効果。つまり、パスカルの多くのテキストを書き換えることで、その構成が聖書のテキストに合わせて調整されていることが明らかになる。そのような例がこれまでに、無秩序で散発的な探索によって、五十個ほど見ついている。言いかえれば、同様の断章のリストは確定したわけではなく、これまでに見つかった事例の数は、上記仮説が偶然によるものではないことを示している、ということだ。
- 2) また、興味深いことに、『パンセ』の多くの断章は、聖書的レトリックから同心円的構造を借用している（聖書の4分の1から3分の1の部分が、上位レベルのテキスト・ユニットにおいてこの構造を擁している）のに加えて、聖書のもう一つの主要な傾向を示している。それは、同心円的構造の中央に疑問文を配するという傾向である¹⁰。実際、聖書の疑問文は[テキスト・ユニットの]中心部において他の部分全体におけるよりも4〜5倍多いのだが¹¹、中心に疑問文が置かれているというこの現象が、『パンセ』の断章S165、S166、S171、S211、S786、S183（S183については後述）においても観察される。これも偶然だろうか。そう主張するのは困難だ。
- 3) さらに、該当する断章の生成研究は、その構造がきわめて堅固であり、したがってきわめて意図的なものであることを一貫して示している。その証明は長くなりすぎる。これについてはすでに、「メモリアル」や「三つの秩序」の断章を対象として、その

⁹ 『パンセ』の断章番号はセリエ版に従い、前にSを付けて表示する。

¹⁰ 次を参照：L. Susini, « D'un centre l'autre. Structures bipolaires dans les *Pensées* de Pascal », *Courrier du Centre International Blaise Pascal*, n° 39-40, 2017-2018, p. 107-124.

¹¹ 次を参照：Roland Meynet, « The Question at the Centre. A Specific Device of Rhetorical Argumentation in the Scripture », dans *Rhetorical Argumentation in Biblical Texts. Essays from the Lund 2000 Conference*, éd. A. Eriksson, T.H. Olbricht, W. Übelacker, *Emory Studies in Early Christianity*, n° 8, Harrisburg, Pennsylvania 2002, p. 200-214.

草稿に見られるテキストの変遷や後日の追記を念入りな読解を通じて実施済みである¹²。ここではほんの簡単な一例として、断章S183を取り上げてみよう。その書き換え (Fig. 1) と、その草稿に見られるテキストの変遷 (Fig. 2, 3) も示す。

S183. Les impies qui font profession de suivre la raison doivent être étrangement forts en raison. Que disent-ils donc? "Ne voyons-nous pas, disent-ils, mourir et vivre les bêtes comme les hommes, et les Turcs comme les chrétiens? Ils ont leurs cérémonies, leurs prophètes, leurs docteurs, leurs saints, leurs religieux, comme nous", etc. Cela est-il contraire à l'Écriture, ne dit-elle pas tout cela? Si vous ne vous souciez guère de savoir la vérité, en voilà assez pour vous laisser en repos. Mais si vous désirez de tout votre cœur de la connaître, ce n'est pas assez regardé au détail. C'en serait assez pour une question de philosophie, mais ici où il va de tout... Et cependant après une réflexion légère de cette sorte on s'amusera, etc. Qu'on s'informe de cette religion, même si elle ne rend pas raison de cette obscurité, peut-être qu'elle nous l'apprendra.

理性に従うと宣言する不信仰者は、理屈において並外れて長けているのが当然である。

では、彼らは何と言っているのだろうか。

「われわれは、獣も人間も、トルコ人 [イスラム教徒] もキリスト教徒も、等しく生き、死んでいくのを見る。われわれと同様、彼らにも、彼らの儀式、預言者、博士、聖人、聖職者がある」云々、と言っている。

このことは、聖書に反しているだろうか。聖書はこれらのことすべてを語っていないだろうか。

もしあなたがたが、真理を知ること大して注意を払わないなら、それだけですぐに安らぎを得るだろう。だが、もしあなたがたが、衷心から真理を知りたいと欲するなら、それだけでは細部まできちんと見たことにはならない。哲学の問題ならばこれで十分だろうが、ここではすべてがかかっているのだから…

しかしながら、こんなふうにはほんの少し考えただけで、人は楽しみに興じるのだ、云々。

この宗教が闇について説明してくれないかどうかについて、この宗教自身から知ろうと努めるのだ。するとおそらく、実際に闇について教えてくれるだろう。(山上訳)

¹² 次を参照 : Laurent Susini, « Pour un Pascal juif », art. cit., p. 321-324 et p. 342-344.

Les impies doivent être Que	qui font profession ÉTRANGEMENT disent-ils donc?	de suivre forts	la RAISON en RAISON .
Ne voyons-nous pas, mourir et les Turcs	disent-ils , et vivre comme les chrétiens?	les bêtes	comme les hommes,
Ils ont leurs prophètes, leurs saints,	leurs cérémonies, leurs docteurs, leurs religieux,	comme NOUS,	ETC.
CELA ne dit-elle pas	est-il contraire tout CELA ?	à l' Ecriture ,	
Si vous ne vous souciez en voilà ASSEZ	guère pour [v]ous laisser	de SAVOIR en repos.	la vérité,
Mais ça n'est pas	si vous désirez ASSEZ	de tout votre cœur REGARDE	de la CONNAITRE , AU DETAIL .
C'en serait mais	ASSEZ ici	pour une question où	de philosophie, il va de tout...
Et cependant on s'amusera,	après ETC.	une REFLEXION LEGERE	de cette sorte
Qu' ON S'INFORME même si peut-être	de cette religion, elle ne rend pas RAISON qu'elle NOUS L'APPRENDRA .	de cette OBSCURITÉ ,	

Fig. 1 – 断章 S183 の書き換え

Les Impies qui font profession de suivre
l'Évangile de Jésus-Christ
disent-ils donc?
Ne voyons-nous pas, mourir
et les Turcs
comme les chrétiens?
Ils ont leurs prophètes,
leurs saints, leurs cérémonies,
leurs docteurs, leurs religieux,
comme NOUS, ETC.
CELA ne dit-elle pas
est-il contraire tout CELA?
à l'Ecriture,
Si vous ne vous souciez
en voilà ASSEZ
de SAVOIR en repos.
la vérité,
Mais ça n'est pas
si vous désirez
ASSEZ
de tout votre cœur
REGARDE
de la CONNAITRE,
AU DETAIL.
C'en serait
mais
pour une question
où
de philosophie,
il va de tout...
Et cependant
on s'amusera,
après
ETC.
de cette sorte
de cette religion,
elle ne rend pas RAISON
qu'elle NOUS L'APPRENDRA.
de cette OBSCURITÉ,

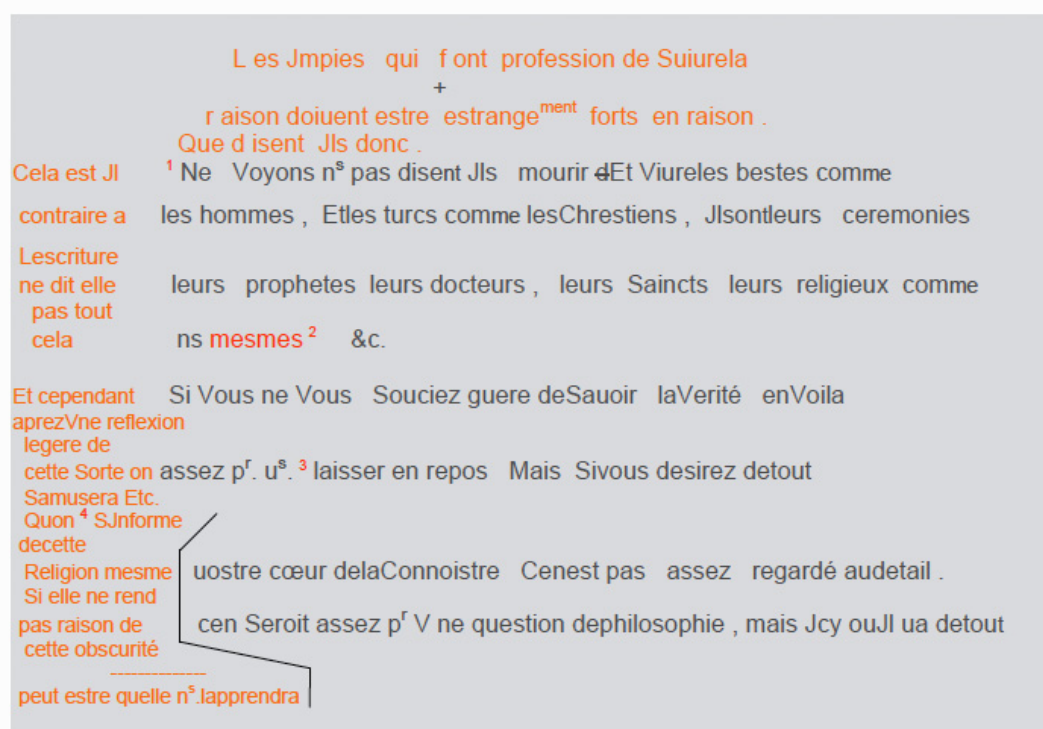


Fig. 2, 3 – 断章 S183 の草稿とその外交的転写 (transcription diplomatique)
(<http://www.penseesdepascal.fr/Commencement/Commencement1-diplomatique.php>)

草稿から、この断章には三つの大きな追記が行われたことがわかる。

- 冒頭の二行の追記：「Les impies qui font profession de suivre la raison doivent être étrangement fort en raison. Que disent-ils donc?」（「理性に従うと宣言する不信仰者は、理屈において並外れて長けているのが当然である。」）
- 余白における二つの疑問文の追記：「Cela est-il contraire à l'Écriture? Ne dit-elle pas tout cela?」（「このことは、聖書に反しているだろうか。聖書はこれらのことすべてを語っていないだろうか。」）
- 同様に余白における、結論的な内容を含む追記：「Et cependant, après une réflexion légère de cette sorte on s'amusera, etc. Qu'on s'informe de cette religion, même si elle ne rend pas raison de cette obscurité, peut-être qu'elle nous l'apprendra.」（「しかしながら、こんなふうにはほんの少し考えただけで、人は楽しみに興じるのだ、云々。この宗教が闇について説明してくれないかどうかについて、この宗教自身から知ろうと努めるのだ。するとおそらく、実際に闇について教えてくれるだろう。」）

そこで、本断章の書き換え (Fig. 4) のなかに、これらの追記箇所を置き直せば、それらの構造上の役割が一致していることがわかる。

- 追記 a, c によって、この両端の 2 箇所が鏡像のように配置され、本質的な反響作用を生じさせる。

- ・追記 b によって、断章に同心円的な構造を与え、その中心には疑問文が配置されることになる。

Les impies doivent être Que	qui font profession ÉTRANGEMENT <i>disent-ils</i> donc?	de suivre forts	la RAISON en RAISON .
Ne voyons-nous pas, mourir et les Turcs	<i>disent-ils</i> , et vivre <i>comme</i> les chrétiens?	les bêtes	<i>comme</i> les hommes,
Ils ont <i>leurs</i> prophètes, <i>leurs</i> saints,	<i>leurs</i> cérémonies, <i>leurs</i> docteurs, <i>leurs</i> religieux,	<i>comme</i> NOUS,	ETC.
CELA ne dit-elle pas	est-il contraire tout CELA ?	à l'Ecriture,	
Si vous ne vous souciez en voilà ASSEZ	guère pour [v]ous laisser	de SAVOIR en repos.	la vérité,
Mais ce n'est pas	si vous désirez ASSEZ	de tout votre cœur REGARDE	de la CONNAITRE , AU DETAIL .
C'en serait <i>mais</i>	ASSEZ ici	pour une question où	de philosophie, il va de tout...
<i>Et cependant</i> <i>on</i> s'amusera,	après ETC.	une REFLEXION LEGERE	de cette sorte
Qu' ON s'INFORME <i>même</i> si <i>peut-être</i>	de cette religion, elle ne rend pas RAISON qu' elle NOUS L'APPRENDRA .	de cette OBSCURITE ,	

Fig. 4 – 断章 S183 の書き換え（草稿に施された加筆部分も記す）

要するに、断章の生成過程がこれら 3 つの大きな追記部分を通じて明らかにしているのは、疑問文を中心にした ABA 型の同心円的な構造であって、これは聖書的レトリックの最も典型的なパターンの一つを再現しているということである。このことは、先述の「反復の効果」とともに、この構造が意図的で自発的であることを示唆している。

ロラン・メネと私が共同で進めているこの研究は、まだ実験的な初期段階にある。しかし、少なくとも結果はすでに十分に一貫性があり示唆的であって、今後探求すべきいくつかの主要な考察の道筋を導くことができる。最後に、そのうちの 2 つを簡単に示しておきたい。

- 1) 第一点は、『パンセ』の断章としての側面に関係する。これについては、上記の構成形態が明らかになれば、新たな視点から再考することが求められる。この視点から捉え直すと、関連する断章の完結性はもはや偶然の産物ではない。『パンセ』は、[修辞

学の]「インヴェンティオ（発想）*inventio*」の段階で中断された計画の未完性を反映しているのではなく、単に自律的であるのみならず、それ自体で完全な構成と均衡をそなえ、その両端の部 *paties* の類似性によって完結性をもった十全なテキスト空間を画することになる。このため、きわめて特別な読み方が必要となる。もちろん断章の枠内にとどまりはするが、その枠内で再度読解を練り直す読み方だ。急いで最後まで進もうと次々とページをめくるような直線的な進行は禁物である。要するに、辛抱強く、瞑想的で、反芻的な読み方であり、サン・シランがある女子修道院長に宛てた手紙に見られる誓約に合致した読み方だ。「院長さま *ma mère*、靈的な書物の読みにおいてつねに犯される誤りは、一度に多くを読みすぎることのように思われます。そうではなく、長い間隔を取り、何度も再開をしながら読むべきです。そうして、肉を消化するために胃に与えるのと同じ時間を精神にも与えるのです¹³。」

- 2) それは、不安定であるだけに、不安な読解でもある。実際、研究対象になっている断章において同心円的構造が頻繁に出現するのだが、それにより、推論の一見線形的な流れのなかに隠れている「構造的な中心 *centres structurels*」がどこにあるかを見出し、再構成するように促され、その性質や存在理由についても考えさせられる。では、そのような中心が隠れている明暗の状態には、特定の機能がそなわっているのだろうか。また、それらの中心は、当該断章の命題 *propositio*、つまりそれら断章が示す対象や到達目的の言表 *énoncé* に対して特別な関係をもつのだろうか。研究の現段階で私は、パスカルが同心円状の断章の「構造的な中心」の位置を、あえて当該断章の主題 *propositum* から見かけの上で最も遠い点に定めているという仮説を立てている。各断章の中心から最も遠い点が、その構造的な中心によってしばしば意図的に焦点化されている。そこには、中心と外側の間の緊張関係が働いている。その関係は不安を引き起こすが、その分精神的エネルギーを解放する効果がある。

単純な一例として断章 S146 を取り上げよう。その書き換えは、ABA 型という最小限の同心円的構造を示している。（Fig. 5）

S146. La grandeur de l'homme est grande en ce qu'il se connaît misérable. Un arbre ne se connaît pas misérable. C'est donc être misérable que de [se] connaître misérable, mais c'est être grand que de connaître qu'on est misérable.

人間の偉大さは、自分が悲惨であることを知っている点にある。木は自分が悲惨であるとは知らない。つまり、自分が悲惨であると知ることは悲惨であるが、自分が悲惨であると知ることは偉大である。（山上訳）

¹³ *Lettres chrétiennes et spirituelles*, « Lettre 63 », dans *Œuvres chrétiennes et spirituelles*, Lyon, Laurent Aubin, 1679, t. 1, p. 485.

La grandeur <u>en</u> ce qu'il se connaît	de l'homme MISERABLE.	est GRANDE
Un arbre	ne se connaît pas	MISERABLE.
C'est donc être <u>que</u> de [se] connaître	MISERABLE MISERABLE,	
<u>mais</u> c'est être <u>que</u> de connaître	GRAND qu'on est MISERABLE.	

Fig. 5 – 断章 S146 の書き換え

枠内の三部分は、いくつかの反復語（grandeur / grande / grand、5 回の misérable、se connaître / se connaît / connaître）によって相互に関連づけられていて、その平行性 parallélisme によって、一文 « Un arbre ne se connaît pas misérable »（木は自分が悲惨であることを知らない）からなる構造的中心の空間を定めている。ところが、この中心は多くの点で特異である。それを囲む [上下の] 二部分は、人間がおのれの悲惨さを知る能力によってその偉大さを証明しようとしているが、この中央部は、想像力による虚構の評価によって、自分を知ることができないという木の唯一の悲惨さを強調している。言い換えれば、周囲の二部分が同じ命題（自分の悲惨さを知ることは偉大である）を明示しているのに対し、中央部は他の二部分に対する反対の証拠として、たしかに論理上は従属しているものの、厳密な文章の一貫性の観点からは、それらとの連鎖のなかでは不要である。それゆえ、第三部の « c'est donc être misérable... »（ゆえに…であることは悲惨である）」の « donc »（ゆえに）は、実際には第二部の内容ではなく、第一部の内容に接続している。つまり、三部分の分割によって明示された最も二次的で最も周辺的な *excentrique* 推論の要素が、断章の構造的な中心に配置されているのだ。なぜか。おそらくこうだろう。論理的観点からすれば最も周辺的な要素を断章の構造の中央に置くことで、全体の枠組みを再構成し、断章の教訓について考察し瞑想させるための視点 *le site perspectif*——ここでは身体と思考との根本的な区別という視点——を秘かに示唆しているのだ。そして、上で見た現象は、実際にはより一般的な傾向の一例であるように思われる。その傾向は、次の三つの結論によって要約しうる。

- 1) 『パンセ』の多数の断章の構成は、論理上の中心の陰に構造的な中心を隠す傾向がある。
- 2) しかし、この構造的な中心を、聖書的レトリックのパターンを少なくとも直感的に把握することを通じて突き止めることは、新たな視点の採用と、『パンセ』全体の見直しの動きへとつながると思われる。
- 3) 最後に、仮に同心円的諸断章の構造的な中心が、多くの読者においてそうであると認識されないとしても（まさかそんなことはないだろうが）、当該断章の成り立ちを規制

している二極構造が、目立たない仕方であれ、それら断章の瞑想的読解を促し育む緊張とエネルギーの主要な媒介のひとつとして機能していることは確かだ。また、その意味で、『パンセ』においても聖書においても、それら構造的中心がきわめてしばしば疑問形で与えられているのは偶然ではない。それはこういうことだ。人はまず、隠された中心を探索し、それを見つけることで霊的に正しい視点を探索するという外的な行為へと静かに誘われる。そこではじめて、当惑という [精神の] 内的な改革へと導かれる。さて、当惑とはすなわち [神の] 探求のことであり、キリスト教にとってそれはもはや発見と同義である。

ANNEXES

Annexe 1 – 「メモリアル (Mémorial) 」の書き換え (R. Meynet, *Traité de rhétorique biblique*, op. cit., p. 650)

+

+ L'an	de grace	1654		1	
– Lundy	23 ^e	nov. ^{bre}		2	
:: jour de	S ^t Clément	Pape et m.	et autres	au martirologe Romain	3
:: veille de	S ^t Chrysogone	m.	et autres	&ce.	4
= Depuis	environ	dix heures	et demi	du soir	5
= jusques	environ	minuit	et demi		6
FEV					7
• DIEU D' Abraham. DIEU d' Isaac. DIEU de Jacob					8
non des philosophes et savans.					9
certitude <i>joye</i> certitude sentiment veue <i>joye</i>					10
• DIEU DE Jesus Christ.					11
DEUM meum et DEUM vestrum.		Jeh. 20.17.		12	
Ton DIEU sera mon DIEU.		Ruth.		13	
+ Oubly du monde	et de Tout	hormis DIEU.		14	
= IL NE SE trouve	QUE PAR LES VOYES ENSEIGNÉES DANS L'ÉVANGILE.			15	
– Grandeur de l'ame humaine.					16
– PÈRE JUSTE, le monde ne t'a point CONNU, mais je t'ay CONNU. Jeh. 17.					17
:: <i>Joye Joye Joye</i> et pleurs de <i>joye</i>					18
- Je m'en suis séparé					19
Dereliquerunt me fontem					20
mon Dieu me quitterez-vous					21
- que je n'en sois pas séparé eternellement.					22
– Cette est la vie eternelle qu'ils te CONNOISSENT seul vray DIEU					23
– et celuy que tu as envoyé					24
:: Jesus Christ					25
:: Jesus Christ					26
- je m'en suis séparé je t'ay fui renoncé crucifié					27
- que je n'en sois jamais séparé					28
= IL NE SE conserve	QUE PAR LES VOYES ENSEIGNÉES DANS L'ÉVANGILE.			29	
+ Renonciation	Totale	et douce		30	
+ Soumission	totale	à Jésus	Christ	et à mon directeur.	31
eternellement	en <i>joye</i>	pour un jour d'exercice		sur la terre.	32
+ non	obliviscar	sermones	tuos.	amen. +	33

Annexe 2 – 断章 S145 の書き換え

Ce n'est <u>que</u> je dois <u>mais</u> c'est	point chercher du règlement	de <i>l'espace</i> ma dignité, de ma PENSEE .
Je n'aurai <u>en</u> possédant	point des terres.	d'avantage
<i>Par l'espace</i> et m'engloutit <u>par</u> la PENSEE	l'univers comme un point , je le comprends.	me comprend

Annexe 3 – 断章 S165 の書き換え

Si <u>il</u> le serait <u>comme</u> les saints	L'HOMME d'autant <i>plus</i> et Dieu.	était <i>heureux</i> , qu'il serait <i>moins</i>	DIVERTI ,
Oui. Mais <u>que</u> de pouvoir	n'est-ce pas être <i>réjoui</i>	être <i>heureux</i> par le DIVERTISSEMENT ?	
Non. <u>Car</u> <u>et de dehors</u>	<i>IL</i> vient	<i>d'ailleurs</i>	
<u>et</u> ainsi <u>et</u> partant <u>qui</u>	IL est sujet font	<i>dépendant</i> à être <i>troublé</i> les <i>afflictions</i>	par mille accidents inévitables.

Annexe 4 – 断章 S166 の書き換え

Nonobstant <u>et ne veut</u> <u>et ne peut</u>	ces misères, être qu' HEUREUX, ne <i>vouloir</i> pas	il <i>veut</i> 'être.	être HEUREUX,
Mais	comment	s'y prendra-t-il?	
Il faudrait, Mais IL S'EST AVISE	<i>POUR</i> bien faire, <i>ne le pouvant,</i> de s'empêcher	qu'il se rendît <i>D'Y PENSER.</i>	immortel.
Les hommes la mort, ILS SE SONT AVISES,	<i>n'ayant pu</i> la misère, <i>POUR</i> se rendre HEUREUX,	guérir l'ignorance, <i>DE N'Y POINT PENSER.</i>	

Annexe 5 – 断章 S171 の書き換え

ON <i>charge</i> les hommes, dès l'enfance, du SOIN de leur honneur, de leur bien, de leurs amis, et encore du bien et de l'honneur de leurs amis. ON les accable D'AFFAIRES, de l'apprentissage des langues et d'exercices. Et ON leur fait entendre qu'ils ne sauraient être HEUREUX sans que leur santé, leur honneur, leur fortune et celles de leurs amis soient en bon état, et qu'une seule chose qui manque les rendra MALHEUREUX Ainsi ON leur DONNE des <i>charges</i> et des AFFAIRES qui les font tracasser dès la pointe du jour.			
Voilà, direz-vous, une étrange manière de les rendre HEUREUX. Que pourrait-ON faire de mieux pour les rendre MALHEUREUX ? Comment, ce qu'ON pourrait faire ?			
Il ne faudrait que leur OTER tous ces SOINS, car alors ils se verraient, ils penseraient à ce qu'ils sont, d'où ils viennent, où ils vont. Et ainsi ON ne peut trop les occuper et les détourner, et c'est pourquoi, après leur avoir tant préparé D'AFFAIRES, s'ils ont quelque temps de relâche, ON leur conseille de l'employer à se divertir, à jouer et à s'occuper toujours <u>tout entiers</u>.			

Annexe 6 – 断章 S211 の書き換え

<i>Jésus-Christ et les apôtres et les premiers saints</i>	a fait ensuite en grand nombre,	des MIRACLES	
parce que et 5'ACCOMPLISSANT rien	les PROPHETIES par eux, ne témoignait	n'étant pas encore que les MIRACLES .	ACCOMPLIES,
Il était prédit que le MESSIE	convertirait	les nations:	
<i>comment sans</i>	cette PROPHETIE la conversion	se fût-elle ACCOMPLIE , des nations?	
Et <i>comment</i> ne voyant pas	les nations ce dernier effet	se fussent-elles converties des PROPHETIES	au MESSIE , qui le prouvent?
AVANT donc et converti tout	qu'il ait été mort, les nations, n'était pas ACCOMPLI ,	ressuscité	
et ainsi	<i>il a fallu</i>	des MIRACLES	pendant tout ce temps.
MAINTENANT car sont un MIRACLE	<i>il n'en faut plus</i> les PROPHETIES subsistant.	contre les Juifs ACCOMPLIES	et les impies,

Annexe 7 – 断章 S339 の書き換え (R. Meynet, « Les trois ordres... », art. cit., p. 90)

La distance infinie des **CORPS** aux *esprits* figure la distance infiniment plus infinie *des esprits* à la **CHARITE**; car elle est **SURNATURELLE**. Tout l'**ÉCLAT** des **grandeurs** n'a point de lustre pour les gens qui sont dans les recherches de *l'esprit*. La **grandeur** des gens *d'esprit* est invisible aux rois, aux riches, aux capitaines, à tous ces grands de **CHAIR**. La **grandeur** de la **SAGESSE**, qui n'est nulle sinon de Dieu, est invisible aux **CHARNELS** et aux gens *d'esprit*. Ce sont trois ordres différents de genre.

LES GRANDS GENIES ont leur empire, leur **ÉCLAT**, leur **grandeur**, leur victoire, leur lustre, et n'ont nul besoin des **grandeurs CHARNELLES**, où elles n'ont pas de rapport. Ils sont vus non des *yeux*, mais des *esprits*; c'est assez.

Les saints ont leur empire, leur **ÉCLAT**, leur victoire, leur lustre, et n'ont nul besoin des **grandeurs charnelles** ou *spirituelles*, où elles n'ont nul rapport, car elles n'y ajoutent ni ôtent. Ils sont vus de DIEU et des anges, et non des **CORPS** ni des *esprits* curieux : DIEU leur suffit.

ARCHIMEDE, sans **ÉCLAT**, serait en même vénération. Il n'a pas donné de batailles pour les *yeux*, mais il a fourni à tous les *esprits* ses inventions. Oh ! qu'il a **ÉCLATÉ** aux *esprits* !

JESUS-CHRIST, sans biens et sans aucune production au dehors de *science*, est dans son ordre de sainteté. Il n'a point donné *d'invention*, il n'a point régné ; mais il a été humble, patient, saint, saint, saint à Dieu, terrible aux démons, sans aucun péché. O qu'il est venu en **grande** pompe et en une prodigieuse magnificence, aux yeux du cœur, qui voient la **SAGESSE** !

Il eût été inutile à ARCHIMEDE de faire le prince dans ses livres de géométrie, quoiqu'il le fût.

Il eût été inutile à **NOTRE-SEIGNEUR JESUS-CHRIST**, pour **ÉCLATER** dans son règne de sainteté, de venir en roi ; mais il y est bien venu dans **L'ÉCLAT** de son ordre !

Il est bien ridicule de se scandaliser de la bassesse de **JESUS-CHRIST**, comme si cette bassesse était du même ordre, duquel est la **grandeur** qu'il venait faire paraître. Qu'on considère cette **grandeur**-là dans sa vie, dans sa passion, dans son obscurité, dans sa mort, dans l'élection des siens, dans leur abandonnement, dans sa secrète résurrection, et dans le reste, on la verra si **grande**, qu'on n'aura pas sujet de se scandaliser d'une bassesse qui n'y est pas.

Mais il y en a qui ne peuvent admirer que les **grandeurs CHARNELLES**, comme s'il n'y en avait pas de *spirituelles* ; et d'autres qui n'admirent que les *spirituelles*, comme s'il n'y en avait pas d'infiniment plus hautes dans la **SAGESSE**.

Tous les **CORPS** le firmament, les étoiles, la terre et ses royaumes, ne valent pas le moindre des *esprits* ; car il connaît tout cela, et soi ; et les **CORPS**, rien. Tous les **corps** ensemble, et tous les *esprits* ensemble, et toutes leurs productions, ne valent pas le moindre mouvement de **CHARITE**. Cela est d'un ordre infiniment plus élevé. De tous les **CORPS** ensemble, on ne saurait en faire réussir une petite *pensée* : cela est impossible, et d'un autre ordre. De tous les **CORPS** et *esprits*, on n'en saurait tirer un mouvement de vraie **CHARITE** : cela est impossible, d'un autre ordre, **SURNATUREL**.

Annexe 8 – 断章 S786 の書き換え

Les choses deviennent à cause	du monde les plus RAISONNABLES du dérèglement	LES PLUS DERAISONNABLES des hommes.	
Qu'y a-t-il que de CHOISIR , <i>LE PREMIER FILS</i>	de moins RAISONNABLE pour gouverner <i>D'UNE REINE ?</i>	un État,	
L'on ne CHOISIT pas celui Cette loi	pour gouverner des voyageurs serait RIDICULE	un bateau qui est <i>DE MEILLEURE MAISON.</i> et injuste ;	
mais et le seront elle devient	parce qu' ils le sont toujours, RAISONNABLE	et juste,	
	<i>car</i> qui	CHOISIRA-T-ON ?	
Le plus vertueux	et le plus habile ?		
Nous voilà chacun	incontinent prétend être	aux mains, ce plus vertueux	et ce plus habile.
Attachons c'est <i>CELA EST NET,</i>	donc <i>LE FILS AINE</i> il n'y a point de dispute.	cette qualité <i>DU ROI :</i>	à quelque chose D'INCONTESTABLE.
LA RAISON <i>car</i>	ne peut mieux la guerre civile	faire, est LE PLUS grand	des maux.